
丸い部屋

叶むすび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

丸い部屋

【Nコード】

N5732A

【作者名】

叶むすび

【あらすじ】

世間は罪に冷たい。だから用意されたんだよ、この部屋は。幸福だろう。

その部屋には窓がなかった。

外部からの光を一切遮断された部屋は黴臭く、そして孤独だ。

男は鉄格子の向こうで口を嚙み、だらしなく伸びた髪の中から白髪を探しては抜いて、という行為を繰り返している。

男は自分が鉄格子の内側にいることにたいして、これといった違和感を感じておらず、寧ろここそが自分にとって相応しい場所だと考えている。何せ何の恨みもない老人を三人も殺したのだ。罪人には罪人の、相応な場所がある。男は世間で言う不況の波に浚われ、失業した者のうちのほんの一人だ。金は底をつき、食料も居住地も失った。ことごとく荒廃した男の体に、悪魔が取りつくのには時間などいらなかった。

しかし。

男は白髪を摘んだまま手を止めて、冷ややかで孤独な牢獄をぐるりと見回した。

窓がないことも、鉄格子の内側にいることも、大した違和感ではない。

しかし、男はただ一つ、強烈な違和感を抱いていた。

この部屋の造形である。

丸いのだ。角という角をそぎ落とされ、滑らかなカーブを描いている。お陰でこの部屋には、隅っこ、というものが存在せず、部屋の真ん中で座っているのもどうも落ち着かない。男は長い間、切っても洗ってもいないバサバサの髪を掻きながら、冷たいコンクリートでできた壁に指を置いた。ひやっと、体の芯から熱を奪っていくようなその温度に、男は驚いてすぐに手を離れた。

格子の向こうの廊下は、鮮やかな世界に続いている。

しかし男は気が付いていた。

永遠に自分は光を目にすることは無いということ。

きつと裁判長は、最も重い刑罰を男に下すだろう。

男は控訴するつもりは更々なかった。

これ以上裁判を続けても、同じであることを察していたからだ。別世界のようにも見える廊下では、一つの足音が響いていた。

それは孤独な牢屋の中に、ひしひしと伝わる。

足音は、最も男に近い位置で止まった。男はゆっくり振り返る。どうせ悪い知らせを引き連れた、警察官か何かだろう。そう思っていた男は、その光景に目を剥いた。子供だ。そこには子供が立っている。五歳程度の、背の低い男の子だ。全身に黒い衣服を纏った子供は、大きな瞳を男に傾けて、やがてゆっくりと笑みを浮かべた。

「こんにちは」

男は久しぶりに警察官以外の人間に話された気がした。思わず会釈すると、クスクスと子供が笑った。

「どう？この部屋。僕が作ったんだけれど」

子供は陽気に笑い、男の方に指を差した。正確には男を指したのではなく、この部屋全体のことを指したのだろう。男は目を見開いた。まさか、こんな子供が、こんな物を作るものか！

「丸い部屋は死の証だよ。世間からの軽蔑や罵倒を柔軟に受け流す。そのための円形なんだ」

子供は笑った。黒い服はそのまま闇に溶け、子供の笑い声だけが、廊下中に響き、やがて薄れて消えていく。男は丸い部屋を眺めた。死の証であるその場所は、自分をしっかりと抱擁してくれていることがわかった。

その翌日、男の判決は裁判によって下された。男は弁護士と言葉を振り切って、その判決を認めた。丸い部屋に帰らなければ裁判所の外にあったカメラやマイクなどの機械を見たとき、男は確かにそう思った。

黴臭くて、冷たくて、孤独な、あの丸い部屋に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5732a/>

丸い部屋

2010年10月27日13時36分発行